

研修報告書No. 3

所属：杏林大学医学部付属病院研修医 新井信晃

研修先：本山町立国民健康保険嶺北中央病院

いの町立国民健康保険長沢診療所

大川村国民健康保険小松診療所

① 県外在住医師から見た高知の地域医療の状況

高知県は人口当たりの医師数が全国でも有数であるものの、医師の偏在と高齢化のため地域での医療が弱体化している、と医療再生機構の職員の方から教えて頂いた。私が研修させて頂いた嶺北中央病院は幸いにも自治医大出身の若い先生方が多く、その実感に乏しかったが、地域に点在する診療所や医院の実情を知るとなるほど、まさしくその通りであった。私は東京都の多摩地区にある大学病院で初期臨床研修を行ったが、数百万人の医療圏において、自院を中心としたいいくつかの病院がセンター化され、患者が医療機関を行き交う状況が当然のものと考えていた。一方で高知を含む多くの地方において、緊急手術が必要な患者でさえ市街地にある医療資源のある中核病院へ搬送されるのに多くの時間を要するのが当たり前である。現に天候を理由にドクターヘリが飛ばせず救急車で中核病院へ搬送した症例もあった。夜間の細い峠道は危険である以上に移送のストレスも大きく、仮に神経系や循環器系の救急疾患であれば予後を左右することも十分ありうる。都会では患者がたらい回しされ救急車内で待機を余儀なくされる事例は多いが、それとは異なる不便さがあるように思われる。

② 研修内容に対する意見

今回 1 か月という短い研修期間であったが、院長先生のご厚意もあり慢性期の療養型病床や、診療所での診療と医療・介護従事者が膝を突き合わせたカンファレンス、デイケアなどの介護現場での実習など、急性期治療を経て地域へ戻った患者さんのフォロー過程を経験することができた。これは大学病院での急性期治療の延長にあり、医療と介護が複雑に絡み合う現場である。私の志す呼吸器外科という専門分野とは対極にある **general** な地域医療・介護を、3 月という初期研修の集大成の時期に経験できたことは幸せなことである。一方で救急当直が無く、ウィークデイのみの研修など大学病院の研修とは全く様相が異なることに当初は面喰らった。例えば来院時 CPA など一定のアルゴリズムの下で研修医も動きやすく、かつ病院スタッフの先生方も手が欲しい症例などに備えて、1 週間に 1 日程度の **oncall** などの体制を整備してもよいかもしれない。

③ 今回の臨床研修で得たと考えられるもの

地域で医師に診療してもらおう有難さを肌で感じる機会に恵まれた。運悪く研修中にインフルエンザに罹ってしまった。単身赴任の寂しさも手伝って、発熱、頭痛、倦怠感など激しい症状に思いのほか当惑した。東京にいれば、直ぐに薬局で解熱剤や漢方を、コンビニで十分な水分と食糧を手に入れて、温かい家で休むことができる。しかし、いわゆる僻地では薬局やスーパーへ行きたくても、車と運転する活力がなければペットボトル 1 本手に入れるのが難しい。老々介護が常態化し、不便な **location** で生活する病を抱えたお年寄りたちが抱える不安は凄まじいものだろう。冬将軍も依然として居座る山里に一人臥せれば、

若い私ですら恐ろしいほど孤独な気分になるのだから。そんな時、指導医の吉村先生がすぐに受診するように取り計らって下さり、丁寧な診察と処方して頂くばかりか、毎日のように声をかけて気遣って頂いた。本当に有難いと感じると同時に絶大な安心感を得ることができた。薬は効果靚面で、解熱した時には自分が携わる医学・医療が如何に偉大で人を安心させる力をもつか、思わず感動してしまった。単に体調を崩したという体験ではあるが、地域における医師の存在と医療活動の深い意義を、文字通り肌で感じる事ができた。ウイルスに対する抗体以上に大変価値があるものを手に入れたと考える。

最後に、研修に際して多大なご配慮と労力を頂いた嶺北中央病院の佐野院長、指導医の吉村先生をはじめ諸先生方、事務の渡辺さんなど病院職員の方々、高知医療再生機構の岡林さんに心から感謝致します。